

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2022年 12月 7日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	李 怜柱

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、京都、京都市動物園
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物福祉実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2022年12月4日 ~ 2022年12月6日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都市動物園、生き物・学び・研究センター主席研究員、山梨裕美さん
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>今回の動物福祉実習は京都市動物園で行われた。はじめに京都市動物園の主席研究員、山梨裕美さんの動物福祉に関する認識アンケート調査研究の話聞き、日本とイギリス両国の一般市民・専門家たちが考える「動物福祉」が色んな点で違うことを知った。そして自分は動物福祉が何だと思ふのか、改めて考えてみる良い機会になった。</p> <p>その後、参加者たちはヤマアラシやプラメngo、アカゲザル、リクガメ担当にチームが分けられて各動物に必要な作業を始めた。私はリクガメチームで、大きさが違う多様な種のカメたちが使えるフィーダー(Feeder)を制作した。担当飼育員さんから現状のことを聞いて、新しいフィーダーのアイディアスケッチを検討して頂き、その修正案を基にフィーダーを作り始めた。しかし頭の中で考えた物を実際を作る過程で想定外の細かい問題が現れることを実感した。試行錯誤を経て完成されたフィーダーは、消防ホースを切ってゆるく編んだネットを4つの棒にかけて、カメの大きさに合わせてネットの高さが調節できる形になった。このネットの上に餌である草を置くと、ネットの穴からでる草をカメが首を伸ばして食べる仕組みである(下段写真)。飼育員さんの最終確認後、カメの餌やり時間にこのフィーダーを使ってみたらカメたちが利用することが確認できた。ただ、まだ新しいフィーダーに慣れていないせいか、カメの中でも特に1-2個体が集中的に食べることが観察される他、元々使われてきた餌台が地面に置かれるとそれを優先的に利用するようであった。一方、ネットで作られたフィーダーの他にも、草を紐で吊り下げてカメが首を上へ伸ばして食べるようにするのも準備した。カメが食べる様子を観察したら、食べる際に噛む動作が精密ではないようで、紐1本だけで吊るした餌は揺らぎでカメがあまり食べれないことが分かった。それで餌を紐2本で吊るしたら程よい揺らぎでカメが少し頑張るとよく食べることが確認できた。ただ、餌を結んだ紐の結び目にカメのクチバシの先端が一瞬引っかかったことを観察したので、結び目はカメのクチバシが届く範囲より高く置いて、餌の草だけ下に長くぶら下がるようにする、という調整が必要だった。この吊るし型の場合も、元の餌台が地面に置かれるとカメが元の餌台に行くことが観察された。このように主な採餌は元の餌台で行われるとしても、今までなかった新しい方法で食べる機会が与えられることはカメのエンリッチメントに寄与できると考えている。また、これから新しいフィーダーに慣れるとより多くのカメに利用されることを期待している。今回のように新しいフィーダーを先に置いて、ある程度食べた後で元の餌台を置くなどの活用法が考えられる。また、当分の間、特定の個体たちだけ新フィーダーをよく使って摂食の個体差が大きくなる可能性もあるので、今後の持続的な観察が必要である。</p> <p>今回の動物福祉実習は、動物の立場で何が必要で、どうすればより安全で効果的にエンリッチメントができるか、そしてそれには考慮すべきポイントが想像した以上に多いということを学ぶ大切な機会であった。</p>

(写真) 高さが調節できるネット型フィーダー
6. その他 (特記事項など)